

フィールドワーク便り

## ナミブ砂漠の厳しい自然とたくましい人びとの暮らし

—ナミビアフィールドスクール報告—

水野一晴\*

フィールドスクールが2010年11月13日から21日にかけてナミビアにおいて開催された。初日は首都のウインドフックのアフリカ人居住地区、カタトゥーラにあるJacob Marengo Schoolにおいて学校の校長先生、野生動物コンサルタント、国連職員の3人のかたの講義を受け、その後にカタトゥーラのマーケットや居住地などを訪問した(写真1)。

2日目は、いよいよ首都からナミブ砂漠に移動する。朝、宿にバスが迎えに来て、それに3台の車が伴走した。首都のウインドフックは市街地がこぢんまりしていて、30分も走ると、もうそこは茶色い大地に灌木が点在する風景の中である。ナミビアは人口が200万人あまりにすぎず、しかもその人口の大半は北部に集中していて、国の大半は白人の大農場とナミブ砂漠によって占められている。私は10年くらい前に初めてナミビアに来たとき、手に入れた全国地図を見て驚いた。なぜなら、その地図に、日本の住宅地図のように土地の所有者名が入っていたからだ。要するに、国土の大半は広大な白人農場によって占められているので、1枚の地図に各農場主

の名前を入れることが可能だったのである。

砂ぼこりを巻き上げながら何時間か進むと、ゲムズベルグ峠に到着した。そこはこれまで走ってきた高地と海岸から続く低地との境界であり、そこから眼下に急な崖と広大な乾燥地帯を目にすることができる。その大地の大きな段差が、植生のギャップにもなっている。バスは小刻みにブレーキをかけて崖のような斜面をゆっくり下っていくと、それまで点在していた緑の灌木が姿を消し、黄金色の草原地帯に移っていく。さらに進むと何も生えていない荒涼とした砂漠の中に取り込まれる。いわゆる礫砂漠(岩石砂漠)である。



写真1 首都ウインドフックのアフリカ人居住地区カタトゥーラを訪問

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

遠くにやや赤みがかかったオレンジ色の砂丘が山脈のように見え、バスが進むにつれてそれがどんどん大きくなっていく。一般に砂漠というと砂砂漠（砂丘）を連想するが、実際には世界の砂漠に砂砂漠が占める割合は三分の一から四分の一にしかすぎない。その礫砂漠と砂丘（砂砂漠）の境界に季節河川のクイセブ川は流れている。「流れている」といっても水が流れることはめったになく、1年のうち水が流れる総日数は、数日から数十日である。そして、近年、水の流れる日数が減ってきた。気候環境変化と上流で取水用のダムがたくさん造られたためであった。我々は、そのクイセブ川の畔、つまり、砂丘のすぐふもとにあるゴバベップ・トレーニング&リサーチセンターに5泊して、周辺の自然や人びとの生活を観察や聞き取りによって、砂漠からいろいろ学ぶのが今回のフィールドスクールの主たる目的である。

ナミブ砂漠は大西洋岸に沿って幅約100 kmあまり、長さ1,000 km以上にわたって分布する南部アフリカ最大の砂漠である。ゴバベップはそんな広大な砂漠のど真ん中にある。施設の電気はすべてソーラーパネルから得ている。また、シャワーの湯も各バンガローの屋根に取り付けられた太陽熱の温水器にたよっている。なにせ、めったに雨が降らないので、太陽光は無尽蔵である。ソーラーパネルで得られた電気は膨大な蓄電池にためられるので、1日中電気が利用できる。私がここを利用して調査を始めた10年前頃はソーラーパネルの設備がなかったので、ラジエーターで電気を起こし、夜11時くらいから

朝の7時くらいまでは電気が止まっていたし、シャワーもプロパンガスを利用していた。それが、今はすべて太陽光である。

3日目は朝からクイセブ川沿いの自然観察を行なった。砂漠の中でこのクイセブ川沿いのみ緑がある。そのわずかな緑の中にさまざまな生物が生きている。私はナミブ砂漠を訪れるのは20回目くらいだが雨を経験したことがない。しかし、いきなり初日から雨が降った。量はさほどでもないが、私にとっては一大事である。学生たちに、「この雨はめったにないものだ」と言い訳をするのにやっきになっていた。これが通常のナミブ砂漠と思われても困るからだ。その後、講義を2つ受け、ゴバベップの施設見学をして、夕方5時から京大とアメリカのDartmouth大学の合同講義が始まった。この合同講義は最初から計画していたものではなかった。私がゴバベップのセンターにスクールの期間に訪れる研究者がいたら講義をしてほしいと頼んであったのだが、ちょうどこの日までDartmouth大学の教員と学生15名がゴバベップに滞在していて、それなら私にも講義して欲しいという要望を受け、合同講義になったという訳だ。学生交流にはよい機会になった。夕食後は私の案内で暗闇の中の野生動物観察を行なったのだが、何も観察できなかった。

4日目はゴバベップ滞在中の一大イベントの日である。まず最初に砂漠の中の小学校を訪れた（写真2）。クイセブ川沿いには点々と村がある。しかし、人はそんなに住んでいないので、校庭にたくさんの子どもたちの姿



写真2 ナミブ砂漠にある J. P. Brand 小学校を訪問

がみられる小学校が突然現れるのには、以前から不思議に思っていた。それで私の興味もあってこの小学校訪問を計画の中に取り入れた。生徒数 289 名で生徒も先生も全員学校内の寮に寄宿している。170 名の生徒は親がない。この小学校は元々地元の子どものために作られたのだが、今は全国から子どもが集まっている。そして、ナミビアで大きな問題になっている HIV で親をなくした子どもたちもここで勉強しているのだ。そのため、民族語で授業を行なうことはできない。アフリカーンス語と英語で授業を行なっている。学校訪問のあとは、ナラメロンを収穫している人びとの村を訪れ、その利用法を見学した(写真3)。ナラとはナミブ砂漠に自然に生えているウリ科の植物で、その果実のことをナラメロンと呼ぶ。クイセブ川沿いに住む人びとは、ナラがとくに豊富に生えているナラフィールドと呼ばれる場所にロバ車で出向き、そこの出先小屋に数週間滞在して、ナラメロンを収穫する。ナラは住民の重要な食料で果肉をそのまま食べたり、果肉を火にかけてドラム缶で煮詰め(写真4)、そ



写真3 クイセブ川沿いのアラムストラット村を訪問

村人はロバ車で自然植生ナラを収穫し、主食と主たる現金収入にしている。



写真4 ナラの果実を火にかけてドラム缶の中で煮詰める

左側には炒って食用にする種が集めてある。

れを熱くなった砂丘の上に流して固まったものを保存食として利用している。また、種は彼らの重要な現金収入で、それを炒ったものや生の種をマーケットで売る。炒った種は食料になり、生の種からは油を取る。2時間ほどインタビューや観察をしたりしていたら、昼間 40°C 以上になる炎天下にいたため、みな疲れが隠せなかった。そんな中、学生たちから「寒流を感じたい！」という声があがっ

た。大西洋岸まで行って、沿岸を流れているベンゲラ海流を体感しようというのである。ゴバベツからこの村まで大西洋に向かって車で数時間来ていたので、あと小一時間で大西洋まで到達できるからである。我々の乗ったバスが礫砂漠をひた走ると、徐々にひんやりとした風を肌で感じるようになった。しばらくすると午後の傾いた太陽にキラキラ反射する大西洋が眼前に広がった。するとバスの中は一斉に「おー！」と歓声が轟いた。鮮やかな青と白銀色が交錯した大海原一面に、ややピンクがかった白いフラミンゴがゆっくりと動いていたのである。海岸に腰を下ろし、弁当を食べながら、みんなフラミンゴの白い姿を目で追った。しばらくすると肌寒くなり、「やっぱり、寒流って冷たいんだな」と実感したのである（写真5）。

5日目は銅鉦山の訪問と周辺に生えているウェルウィッチア (*Welwitschia mirabilis*) の観察を行なった（写真6）。幅の広い凹地などに、この奇妙な裸子植物が生育している。ウェルウィッチアは数百年～千年以上生きるナミブ砂漠にしかない固有種である。ここにしかないのに日本語の異名がある。その名も「奇想天外」であり、たしかにその奇妙な風貌と砂漠の中のその長寿命は奇想天外であった。ナミブ砂漠はサハラ砂漠と比べて、植生景観や分布環境は似通っているものの、植物の多様性がきわめて高いなど、植物の構成や生い立ちでは全く異なっている。これは、ナミブ砂漠の起源が8,000万年以前にも遡る（少なくとも過去8,000万年にわたって気候環境が乾燥～半乾燥の間を変化し



写真5 大西洋のフラミンゴを見ながら昼食  
ベンゲラ海流（寒流）の影響で肌寒い。



写真6 ナミブ砂漠の固有種ウェルウィッチアの観察

この奇妙な裸子植物ウェルウィッチアは数百年から千年以上生きるといわれている。

ていた）ことと関係している。その後、クイセブ川沿いのホメブなど3つの村を訪れて、インタビューを行なった。バスは途中までしか行けないので、炎天下の中歩いて村まで行った。村の近くまで来たとき、同行したゴバベツのスタッフが遠くを見つめて「おー！」と声を上げた。その視線の先を見ると、何とクイセブ川に水が流れているではないか。先ほど述べたとおり、私はこれまで20回くらいナミブ砂漠に来たが、クイセ

ブ川に水が流れているのを見たことがなかった。私も思わず、「おーーーー！」と声をあげた。スクールに 1 日遅れで合流した人の話では首都のウインドフックで 3 日前の夜から 2 日前の朝まで夜中じゅうすごい雨が降ったという。ウインドフックはクイセブ川の上流近くに位置する。そして村人に聞くと昨夜に水がここまでやって来たという。つまり丸 2 日間かけて上流で降った雨が徐々にこのゴバベップ近くまでやって来たということになる。正確にいうとゴバベップまで水は来ていない。ゴバベップから 20 km 上流のここホメブまで水がやって来た。源流からゴバベップまで川は約 250 km 続いている。すなわち、上流で降った雨は丸 2 日間かけて 230 km の距離を流れてきたのである。砂漠を流れる川に自然のたくましさを感じた。このホメブでは、シルトの堆積層も観察した。2 万年くらい前に洪水で川沿いに膨大なシルトが堆積し、それが高さ 10 m 以上の崖を作っている。2 万年前といえば最終氷期の最盛期であり、アフリカは乾燥して、サハラ砂漠が拡大していた時代である。その時代になぜここでは洪水があったのかが、環境変遷史の研究者たちをここに釘付けにしている所以である。

ゴバベップに戻った我々は東京外大の永原先生の「ナミビアの歴史」についての講義を受けた。まさかナミブ砂漠のど真ん中で、日本語でナミビアの歴史について講義を受けられる日が来るなんて夢にも思わなかった。永原さんの講義で印象的だったのは前日に訪れた小学校の近くの村ローイバンクのことであ

る。ここは昔から水が得られて、今でも近くの町のウォルスベイまで水を供給している。そのローイバンクに小さいながらも目立つ教会が建っている。まさにランドマークのようなポジションである。私はローイバンクを通るたびにその教会になぜか引きつけられた。永原さんのお話では、その教会こそが、ドイツのキリスト教ミッション、ライン・ミッション団が 1845 年に布教の拠点としてローイバンクに基地を建設したときの中心の教会だったのである。

夕食後にはクイセブ川沿いで夜のサソリ観察を行なった。樹木の幹に赤外線的光を当てると幹にへばりついているサソリの体の色素が反応して暗闇の中から白く輝いた姿が浮き出してくる。昼間樹皮の下に隠れているサソリが夜になると出てくるのだそうだ。これにはけっこうみな「ウォー」と声をあげて感動していた。

6 日目は朝 7 時半からクイセブ川沿いの自然観察と調査方法に関する実習を行なった。なぜ、そんなに朝早くからかといえば、快適に調査できるのは朝 9 時までだからである。太陽が頭の上の方に来ると、もう灼熱地獄だ。みんなに川沿いに穴を掘ってもらった。穴を掘るとそこには長年かかって川の流れてによって運ばれて積み重ねられた堆積物を観察できる。いわゆる土壌観察である。その堆積物の観察からどのように過去の環境をひもといていくかを説明した。一応、「なるほど～」と学生から声が聞かれたので、内心ほっとした。

午後は学生たちに 3 つの班に分かれても

らってクイセブ川沿いで「自然の何かの地図を作る」という課題を出し、学生たちは暑い中、川沿いを歩き回って地図作りに精を出した。夕方涼しくなると、砂丘の下で靴を脱ぎ、みな素足で砂丘の斜面を登った。夕日で赤く染まる砂丘を、足の裏で砂を感じながら登るのは最高にいい気分であった（写真7）。砂丘の上ではみな砂の上に座りこみ、地平線まで幾列にもなびく砂丘の波に、真っ赤な太陽が飲み込まれていくのを静かに目で追った（写真8）。偉大な自然を肌で感じ、崇高な気分浸った。そしてビールで乾杯、さらに、大きなスイカを運んできたので、スイカ割りも行なった。海岸の砂浜ならぬ砂丘の上でのスイカ割りである（写真9）。夕食の時にはグループごとに午後の課題演習の発表会を行ない、夜遅くまで議論が続いた。

7日目は朝5時に出発した。バスで首都までの帰路の途中、野生動物を観察するためである。朝早く出発したおかげでシマウマやオ

リックス、クウドウ、ダチョウなどがいきなり視界に飛び込んできて、そのたびにバスの中は大騒ぎである。途中、かつて湿潤であった時代に羊の遊牧民が休憩場所に使っていた洞窟を訪れた。床は羊の糞で敷き詰められている。今は砂漠なので羊の遊牧などみられないが、そういう時代があったんだと、砂漠の中に忽然と現れる洞窟の中で、いにしえの世界に思いを馳せた。

8日目はナミビア大学で国際ワークショップ



写真8 砂丘の上で夕日を見ながら記念撮影



写真7 砂丘を登る

背後に見えるのは5泊したゴバベップ・トレーニング&リサーチセンター（中央の塔は、くみ上げた地下水を配水するための水道塔）。



写真9 砂丘の上でスイカ割り

背景のクイセブ川沿いの森林地帯は遠方の礫砂漠（岩石砂漠）と手前の砂砂漠（砂丘地帯）の境界をなしている。砂丘地帯は大西洋岸まで続く。

プ (“Dynamics of Socio-economic Change, Local Environment and Livelihood in Southern Africa: From the Approach of Area Studies”) を開催した (写真 10)。上級生たちが長い時間をかけて準備したプレゼンテーションを行ない、新聞社も取材に来ていたので、後に発表者たちは新聞に写真が掲載された。翌日は、朝食後、泊まっているペンションで閉会式を行ない、充実したフィールドスクールは無事幕を閉じた。お昼には私はすでに飛行機の上にいる。



写真 10 ナミビア大学で行なわれた国際ワークショップ  
ASAFAS の院生たちが研究発表を行なった。

---

## タイ・フィールドスクールの概要

片岡 樹\*

2010 (平成 22) 年 9 月 12 日から 20 日まで、「組織的な大学院教育改革推進プログラム—研究と実務を架橋するフィールドスクール」の一環としてタイ国でのフィールドスクールを実施した。日程は下記のとおりである。

9 月 12 日：チェンマイ空港に集合。

9 月 13 日：チェンマイからチェンマイ県チャイプラカーン郡ファファーイ村へ。共有林の住民グループの話聞く。同郡のフオイボン村で宿泊。

9 月 14 日：チェンマイ県ファーン郡、メーアーイ郡へ。有機農業グループの代表者の話を聞き、ミカン園を見学する。フオイボン村泊。

9 月 15 日：フオイボン村で終日過ごす。

9 月 16 日：チェンマイ県からチェンラーイ県へ移動。タートンからドーイ・メーサロンを経てメーサーイの国境市場を見学。さらにチェンセーンに移動し宿泊。

9 月 17 日：チェンセーンからチェンマイ市に移動。市内の NGO によるストリート・チルドレン支援活動を見学。チェンマ

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

イ泊。

9月18日：チェンマイ市内の市場を見学。  
午後は Link の事務所で総括討論会。

9月19日：終日チェンマイで過ごす。翌  
日のワークショップの準備。

9月20日：チェンマイ大学でワークショッ  
プ。夕刻にチェンマイ空港で解散。

このフィールドスクールの目的は、タイ北部で水源林の環境保護を支援している NGO のフィールドを訪ね、現実に目の前で起きている問題にいかに関わるかを考えることを通じ、フィールドワークや学問について考える視座を養うことである。

我々に協力してくれたのは Link という NGO である。これはタイ国北部、チェンマイ県北端のミャンマー国境に近いファーン川沿いの村をフィールドとし、そこで共有林づくりを行なう村人グループを支援している団体である。<sup>1)</sup> 具体的には、共有林の地図づくりを支援するのが主な内容である。共有林が成り立つためには、村人内部で一致してその取り決めを守るだけでなく、外部の人々にもそれを認めてもらう必要がある。なぜならば、法的には国有林である場所を事実上村の管理のもとに運営するには、それを政府（とくに森林局）が少なくとも黙認する必要がある、また不法伐採を行なう外部の業者がそこを共有林と認め立ち入りを断念する必要があるためである。そのためには、村人自身が、共有林の区画と管理維持の実績を外部に向け

て客観的に証明しなければならない。従来のような、村人どうしの暗黙の了解に頼った森林経営だけではだめで、それを客観的データとして提示することが現在の共有林運動には求められているのであり、そのために GPS 等を用いた測量、作図の技術を提供するのが Link の役割である。

Link の代表の木村茂さんは、学部時代の早稲田大学在学中に探検部でタイ国の山地を訪れ、山地でぶっつけ本番で覚えたラフ語の教科書を出版したという伝説の持ち主で、根っからのフィールド派である。大学院時代は人文地理学を専攻してチェンマイ郊外の農村で長期の住み込み調査を行ない、追手門学院大学で教鞭をとっていたが、数年前に一念発起して教職をなげうち、チェンマイで NGO (Link) を立ち上げたという経歴をもつ。研究と実務を架橋するためのフィールドスクール、という我々のプログラムにまさにぴったりの存在であり、今回のフィールドスクールも、我々のプログラムの趣旨を説明したうえで、木村さんに旅程のアレンジを依頼した。

今回のフィールドスクールの目玉は NGO による共有林支援であるが、それは日程全体のあくまで一部にすぎない。そのほかに、ファーン川流域の見学にあたっては、山地民カレン族（パカニョーとも呼ばれる）の村で毎晩ホームステイし、タイ国の山地での生活を参加者に体験してもらった。私もタイ国の山地でこれまで調査を行なってきたが、カレ

1) Link と木村氏の活動については、木村 [2007] を参照。



写真1 共有林の立体地図の説明(ファファイー村)

の村で寝泊まりするのは初めてのことであり、いろいろと新しい発見があって勉強になった。またファーン川流域では、地元の住民運動リーダーのナロンさんという人に、有機野菜販売の試みや、ミカン園プランテーションがもたらす環境問題や社会問題について話を聞きながら、彼の案内で現場を見学させてもらった。

ファーン川流域の見学の後は、山を越えてチェンライ県の国境地域に足を運び、中国から陸路移動してきた旧国民党軍の司令部が置かれた村や、ミャンマー国境の交易でにぎわうメーサーイの市場、さらにラオス、ミャンマーとの国境に近く、メコン川を下る中国の貨物船がひっきりなしに発着するチェンセン港などを見学した。

チェンマイに戻った後は、アーサー・パッターナー・デック財団という NGO で働く出羽明子さんたちの案内で、市内のストリート・チルドレン支援活動の現場を案内してもらった。ビルマから流入した子どもたちや崩壊家庭の子どもたちがチェンマイで浮浪児となり、路上での物売りや児童売春の世界に巻き

込まれていく。街娼となった少年少女たちに避妊具を配布する巡回活動に同行させてもらったが、これは直接には売買春を助長する活動でもありうる。百パーセントの正義を求めればそうなるが、しかし目前のより大きな問題を防ぐには、これは間違いなく有効である。安全な場所から正義を叫ぶだけでは世の中は改善されない。正義は決してひとつではないということを学ばされた。

フィールドスクールの最後には、チェンマイ大学社会学部で、参加者たちの見聞を総括するためのワークショップを企画してもらった。チェンマイ大学の先生たちにそれぞれコメンテーターを務めていただいたのだが、1、2年生を主体とする1週間の駆け足ツアーの見聞を聞いてもらうには少々大げさだったのではないかと思う。プレゼンを準備する学生の側も困惑していたようだし、チェンマイ大学側も同じだったのではないかと思う。本プログラムでは院生主体による海外でのワークショップが奨励されているが、ひょっとすると再考の余地があるかもしれないというのが率直な印象である。

ところで、今回のフィールドスクールには、実はもうひとつ隠された目的があった。それは Link のフィールドでの活動を学生たちに見てもらふことのほかに、木村さんや Link のスタッフの富田さん、あるいは出羽さん自身を学生に見てもらふことである。日本人として東南アジアの現場に飛び込んで何ができるのか、彼らはどんな志をもって、どのような困難に耐えてそれを行なっているのか、また、学問の世界で得た専門知識をどう

やって援助の場に生かすのか。木村さん、富田さん、出羽さんらは、それを教えてくれる生の教材である。毎日見学の日程が終了すると、夕刻から夜にかけて、有志が木村さんや富田さんを囲んで酒を飲みながらいろいろなことを語り合った。結局毎晩宴会に終始してしまった感があるが、現地でがんばる日本人と本音で語り合うという点では所期の目的を果たせたのではないかと思っている。

最後に、この場を借りて、フィールドスクールの実施にあたりお世話になった Link の木村茂さん、富田千草さん、アーサー・パッターナー・デック財団の出羽明子さん、

チェンマイ大学社会学部のクワンチーワン・ブアデー先生にお礼を申し上げたい。また今回のフィールドスクールは、改革プログラム代表の竹田晋也先生および改革プログラム事務局の落合知子さん、小川裕子さんその他の方々の協力なくして実現し得なかった。あわせてお礼を申し上げたい。

#### 引用文献

木村 茂. 2007. 「森と生きる人々に学んで—北タイの村おこし試行錯誤」加藤剛編『国境を越えた村おこし—日本と東南アジアをつなぐ』NTT 出版, pp. 135-163.

---

## トルコの神秘主義教団を訪ねて

—あるムスリムたちの宗教実践—

西山愛実\*

ここは、トルコのイスタンブルにある古い建物の一室。その中では、100人を優に超える男性たちが腕を組み、輪になって周っている。輪の中心には、裾の長い白いワンピースのような服を着てくるくと回転する若い男性、そして同じく長い、しかし黒い衣を身にまとい、体を上下に動かしながら、何やら呪文のようなものを唱え、皆を先導する初老の男性がいる。部屋の隅には、太鼓やタンバリ

ンのような楽器でリズムを取る者が数名並ぶ。20畳程のその部屋には人があふれ、外はもう肌寒いというのに、部屋は熱気に包まれている。その半階ばかり上部に位置する女性専用の屋根裏部屋にまで、熱い空気と、加えて汗の匂いが漂ってくる。それともその熱気は、私の隣で、首や手を激しく振り回している若い女性から湧き立っているのであろうか…。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

トルコは、西にギリシアとブルガリア、東にイランやアルメニアを隣国とする、アジアとヨーロッパの境に位置する国である。共和国建国（1923年）初期、後に「アタテュルク（トルコの父）」という姓を与えられるようになるムスタファ・ケマルによって、数々の「世俗化・政教分離」政策がとられた。これらの政策により、「反近代」の象徴として禁止の対象となったもののひとつが、今回取り上げる「タリーカ」である。

タリーカとは元来、「道」を意味するアラビア語である。そこから、信仰の内面を重視するイスラームの神秘主義の思想・運動（タサウフ）においては「神へ至る道」、転じて、「神と合一するための修業方法」、そして、修業を行なう人々が集まる「集団」の3種類の意味を有する。本稿で取り上げるのは3番目の、神秘主義の教団を意味するタリーカである。

さて、トルコでは1925年の法律によりその結成・活動が禁止されているはずのタリーカであるが、彼らが逮捕されるおそれはないのだろうか？ …どうやら心配は無さそう。夜の10時過ぎに、近所中に響きわたるほどの盛大な音を出しているところからして、秘密警察や軍部の人間が入ってくることはないのだろう。

1925年の法律制定以来、現在に至るまで禁止されているタリーカであるが、このように、実際には数々の教団が存在し、活動を行なっている。トルコでは1945年の複数政党制導入に始まり、イスラーム派政権成立などの折に触れ、政治、社会全体においてイス

ラームの実践が顕在化してきた。法律の施行直後は政府による激しい弾圧を受けていたタリーカも、政党や企業、文化保護、教育活動と結び付き、次第に社会の表に出てくるようになった。彼らの存在はトルコにとって、いわば、「公然の秘密」となっているというのが現状である。

このタリーカ（Z教団とする）も、「伝統音楽」の擁護者として、政府によるお墨付きのもと、冒頭に挙げた修行活動を行なっている。この修行は、ズィキルと呼ばれる。ズィキルとは「想起」を意味し、タリーカにおいては、神の名や祈祷の句を唱える修行の意味で使用される。黒い長衣の男性をはじめ、皆が声を揃えて発していたのは、神を称える言葉だったのだ。熱気と興奮に包まれたZ教団のズィキルに参加しながら、私の脳裏には2年前の日々が蘇っていた。

## P教団との出会い

筆者が初めてトルコを訪れたのは、上述したような、複雑な状況にあるトルコのタリーカを「この目で見てみたい」という興味からであった。そして、当時、所属していた学部との交換留学生として、トルコの首都アンカラに赴くことになった。トルコに着いてからしばらくは、大学生や先生、友人の家族、寮の警備員、果てはナンパ目的の若者・老人などさまざまな人に、「もしご存知でしたら、タリーカを紹介してくれませんか？」と尋ね歩いていた。尋ねるのを止めたのはいつ頃だったろうか。理由は、あまりにも相手の反応が悪く、期待外れなものだったからである。省庁

が立ち並び、いたる所でアタテユルクの垂れ幕や肖像が目につく第二の都市、アンカラでは、大きく分けて以下2種類の回答を得ることができた。ひとつは、タリーカに関し言及を避けるもの―「(一瞬の沈黙) タリーカの元々の意味は道というんだ。ルーミー(13世紀の著名な神秘主義詩人)の神秘詩を読みなさい、あれは素晴らしい」、「それよりもクルアーンを読むのが先よ」もうひとつは、タリーカを批判するタイプのもの―「そんなところに行ったら洗脳されるよ!」、「70代のやもめと結婚させられるから、止めた方がいい」、「(周りの友人に向かって) ちょっと聞いてよ、この子、タリーカに興味があるんだって!」等々。滞在を始めてから2、3ヵ月経ち、私があればほどまでに見ることを望んだタリーカは、決して少なくない人たちにとって偏見や嘲笑の対象であり、現在でも社会のタブーとなっていることが徐々にわかってきた。

説教をされるか、からかわれるか、タリーカとのつながりを得られないまま時は過ぎ、紹介をお願いするのにも飽きていた頃、ある知人から声をかけられた。彼女の祖父母がタリーカに通っており、私に見せてくれるよう2人に頼んでくれたらしい。彼らは私を快く受け入れてくれ、こうして初めてタリーカに参加できることになった。

#### 修業の集会―神への感謝とチャイの時間

タリーカに参加するまでの過程で、私はタリーカに対し、渡航前とは異なる思いを抱くようになっていた。「それほどまでにおかし

な組織なのだろうか」、「どんな怪しげなことが行なわれているのだろうか」…。このような気持ちを抱いたまま、知人の祖母に連れられて訪れたタリーカでの体験は、筆者のこのような疑問をいろいろな意味で裏切ることとなった。

本タリーカ(P教団とする)は教団付属のワクフ(寄進財団)により、食事提供などの慈善活動、書物やシャイフ(教団長)の説教を撮ったDVDの出版・配布等を行なっているが、一般の参加者(教団員とする)にとって最も身近な活動は、週に1度のズィキル修行のための集会である。教団員たちの言葉を借りれば、ズィキルは「万物の創造主である神へ、感謝を表す行為」であり、この実践のためにP教団に参加していると話す人が多かった。P教団では、この集会は男女別に行なわれ、断食月など特別なときでない限り、教団員それぞれの自宅で開かれる。私が参加したB地区の女性の集会は、男性が礼拝のためにモスクへ行く金曜の昼過ぎに行なわれていた。B地区の女性の集会の参加者の平均年齢は60歳前後で、人数は5~13名ほどであった。

ズィキルは音楽のようなリズムに合わせて行なわれる。始めはゆったりとしたテンポで、徐々に激しく、最後は緩やかに終わる。教団員たちは輪になって坐り(彼女たちは腰が悪いため坐りながら行なうのであって、男性のズィキルは立った状態で行なわれるという)、神を讃える言葉や神の美称を唱えながら、リズムに合わせて首や上半身を上下左右に動かす。観光客も訪れるメヴレヴィー教団

などのズィキルやインターネットサイトの動画で見られるような、皆が同じ動作をする「整った」ものではなく、本B地区の女性の集会では、ズィキル時の所作はばらばらであった。シャイでおしとやかなEさんは声も動作も小さく、元気で強気なMさんは叫ぶような大声を出しダイナミックな動きをする、というように、身振りや発声にそれぞれの性格が出ているのも興味深い。いわゆるトランス状態になる人はいなかったが、周りの呼びかけに気がつかないほど熱中する人もいる。反対に、仕切り役が不在だったり、声の調子が悪かったりする日は盛り上がり欠缺、ズィキルの間にあくびをする人、居眠りをする人もいた。私も、ズィキルをしていて気持ちが良くなる時もあり、寝てしまう時もあり、「のれる」かどうかは、その場の雰囲気によって左右された。

ズィキルの雰囲気は、開始前の雑談時とは異なり神妙なものになるが、携帯電話で通話する者が出るように（「もしもし、いまズィキルの最中だから、後にしてくれない？」）、張りつめた空気の中で行なわれていると言いはない。40分から1時間ほど続くズィキルの後は、ソファに坐りなおして皆で雑談するのが常であった。男性の集会ではズィキル終了後はチャイ（紅茶）が振る舞われるが、女性たちの場合ではシャイフの通達によってこの行為は禁止されている。「神聖なズィキル修行」の後に、その会場が「井戸端会議」と化すことを防ぐためである。とはいえ、家の主は通常、チョコレートや飴などの菓子類を配り、来訪者をもてなす。特に、客人に対

し食べ物を振る舞うという行為は、トルコ社会全体において美德とされるため、彼女たちはここで、慣習と師弟関係の「せめぎ合い」を体験することになる。甘いお菓子は、彼女たちにとってその妥協点なのだ。振舞いに対しては、すぐに手を伸ばす人もいれば、一度は必ず断る人もいる。しかしながら、結局は主のすすめを断れずに、その場にいる全員がチャイの代わりに小さなお菓子をつまみ、おしゃべりに興じていた。ときにはパンや料理、明白な禁止の対象であるチャイが出されることもあった。遠方の家で集会が行なわれた場合はその割合は高くなり、普段は難色を示す人も、「掟破り」となるこの行為を黙認し、おいしそうにチャイやお菓子をいただく。

#### タリーカをめぐる衝突

気がつけば、目の前のZ教団のズィキルは終わりを迎えているようである。先ほどとは打って変わった静寂した空気の中、参加者は各自、一心に祈りを捧げている。祈りが終われば、ズィキルは終了である。P教団B地区では体験したことのなかった、迫力のあるズィキルの余韻に浸っているうちに、周りにいた女性たちはそれぞれに解散し、別室に移動する人たちもいる。にぎやかな声が聞こえてくるところからすると、Z教団の女性たちも、ズィキルの後のおしゃべりは欠かさないようだ。ただし、P教団B地区と違い、参加者には若い人も多く、遅い時間帯にもかかわらずひとりて来ている女性、また外国人観光客の姿もある。欧米からの訪問客が多いの

か、通訳係と思しき女性が流暢な英語で受け答えをしている。外国人の訪問は私が初めてだったろう P 教団では見られなかったこの光景に感心し、話に聞き耳を立てていると、隣で陶酔していたあの女性に呼びとめられた。お茶のお誘いかしら、といういやしい予想はずれ、ズィキルの後にシャイフの講話があることを教えてもらう。いわれてみれば、数は減ったものの、その場に残った数名の女性たちが、壁に設置されてある薄型テレビの前に陣取っている。画面に移ったシャイフは、先ほど、黒い長衣をまとい、輪の中でズィキルを指揮していたときとはずいぶん雰囲気の違い、ウィットに富んだ講話を行なっている。普段は弁護士として働くというシャイフは、いつも頭にタツケ（特に敬虔な男性が好む、礼拝時に被る帽子）を被り、厳格な口調で説教をする P 教団のシャイフとは、だいぶ様子が異なるようだ。煙草を吸いながら説教をする彼ならば、ズィキルの後に女性

たちがチャイを飲むことも許しているかもしれない。

このように彼女たちと一緒に修行に参加していると、タリーカが偏見や嘲笑の的となっているというトルコの現状を忘れてしまいそうになる。私の目には、彼女らの宗教実践は真摯なものとして映り、彼女たちの姿勢からは、ただ「神を想う気持ち」を感じることができた。一方、タリーカを蔑視する人々がいることも確かであり、彼らが特別に悪意をもった人たちであるかという点、私にはそうであるとも思えない。タリーカに参加する人も、タリーカを批判する人も、どちらも「ふつう」のトルコ人であり、社会的、個人的に何らかの力が加わったときに彼らは衝突を起こす。宗教をめぐる、さまざま議論が交錯する現代トルコ社会を理解するためにも、ときに「ふつう」の人々が対立する争点となるタリーカに今後も注目していきたい。

---

## 安定化の進む国境地帯

—ワンカー陣地からココ村へ—

佐々木 研\*

「ドーナ山脈の山頂からは我々のエリアだ、君の安全は保障する。ただし、ドーナ山脈の

向こうから国軍と共に来れば君の安全は保障できない。」2004年7月にミャンマー連邦カ

---

\* 東京大学大学院新領域創成科学研究科

レン州東部のココ村で、調査許可を求めた私に民主カレン仏教徒軍 (DKBA: Democratic Karen Buddhist Army) の中隊長が告げた。この時、ようやく調査許可がおりたことで喜んだことを覚えている。私は、自給自足を営むカレンの調査をするために 2004 年から 2008 年までフィールドワークを行なったが、カレン州内の情報が乏しいためもあり、調査を開始するまでに 1 年を要した。カレン州東部が、事実上 DKBA の解放区であることもこの時になってようやく理解し始めたのである。その後フィールドワークを行なう時は、主にココ村を拠点にした。ココ村は、ミャンマーとタイの陸路貿易が最も盛んなミャワディ市の北方に直線で 16 km ほどの距離にあり、国境の一部を構成するタウンリン川の西岸に位置している。村は 1995 年に設立され、それ以前は反政府武装闘争を続けていたカレン民族同盟 (KNU: Karen National Union) の拠点であった。この拠点はカレン語でコウムラ地区に位置していたが、対岸であるタイの地名にちなんでワンカー陣地と呼ばれていた。80 年代後半以降、国軍は KNU の主要な資金源である国境沿いの KNU 拠点に対する攻勢を強め、1995 年 2 月に KNU 最後の拠点であったワンカー陣地を陥落させた。この 3 ヶ月前に KNU で内部分裂がおり、政府に帰順したメンバーが中心となって DKBA を設立している。DKBA はワンカー陣地を陥落させてすぐにコウムラ駐屯地を設置し、駐屯地を囲むように住宅が建設されココ村と呼ばれるようになった。コウムラ駐屯地は DKBA 第 999 特殊大隊の本

拠地となっており、この大隊はアジアハイウェイより北へタイ側のターク県境付近まで、ドーナ山脈山頂から東へ国境線までを支配地域としている。ココ村周辺では集団農場が広がり、とうもろこし、豆が生産されタイ側に輸出されている。国境では通関税が徴収され、これが第 999 特殊大隊の主な資金源となっている。2006 年以降はゴム、油ヤシが栽培され始め輸出に備えている。この大隊の支配地域にはメプレー川を中心とした平野が広がっている。そこでは、現在では希少な水稲栽培を主な生業とする自給自足社会がカレンによって営まれている。

カレン村落で調査を行なうには、ココ村から森林を切り開いて開通した幹線道路を通る。幹線道路はチークなどの木材を搬出し、タイ側へ輸出することを目的として 1995 年以降に順次延伸され一部は舗装もされている。チークの商業伐採が政府によって認められているのは DKBA のなかでも第 999 特殊大隊のみであり、ドーナ山脈以西やアジアハイウェイ以南の国境沿いに駐留する他の DKBA 部隊は認められていない。タイの木材業者はココ村にトラックを常駐させ、平地の奥にあるカレン村落に直接乗り付けてチークを積載していた。カレン村落に向かうには途中で検問を通過する必要がある (写真 1)。2006 年 2 月に初めてここを通過した際には、国軍兵士が詰めていた。この時期にカレン村落で調査を行なっていたところ、国軍が村内を通過したことがある。一列縦隊の隊形で前進する国軍が村を離れるまで、DKBA 兵士は銃を手前に保持し緊張した面持ちで国



写真1 幹線道路上の検問



写真2 建築ラッシュのココ村

軍を見送っていた。DKBAは国軍と協調しKNUと対立してきたが、完全には国軍を信頼していない様子が伺えた。

2006年3月にココ村を訪れた時には、村内は建築ラッシュでトタン屋根の近代的な家屋が建ち始めていた(写真2)。学校も建設され、通学する生徒は制服を着ていた(写真3)。以前は不安定だったタイからの電力供給も安定し、ビデオ上映館も登場し食堂や衣類、加工食品などを販売する雑貨店も増えていた。雑貨店で販売される商品の多くはタイ側から運びこまれたものである。あるDKBA幹部にパソコンの調子が悪いから見てくれといわれ、駐屯地を訪問したが、正門には「CAMP KOMURA」と英語の看板が掲げられていた。事務所には数台の液晶モニターのパソコンが並んでいた。さすがにインターネットには繋がっていなかったが。

2008年3月に訪れた時には、商店街の建設が計画されており、予定地ではセメントが積み上げられていた。以前は平屋に住んでいた先のDKBA幹部は、天井の高い2階建ての立派な家に住み、大型テレビでタイの番組



写真3 制服を着たココ村の生徒たち

を見ている。ココ村では、比較的裕福な家庭の子どもたちはタイの学校に通学しタイ語も学習している。この幹部の子息もタイ語の書きとり練習をしていた。

ココ村は訪問するたびに発展していく様子が伺え、村の人口も増えているような印象を受ける。村内では飲酒が禁じられているが、夜間でも人の往来が多くタイ側に劣らずにぎやかである。ココ村郊外には第999特殊大隊大隊長のチットゥー大佐個人が保有する広大なゴム林が広がっている。DKBAは森林を焼き払い、ゴム林やとうもろこし畑をさらに拡大するなど、経済的な基盤を次第

に強固なものにしているようである。この時、カレン村落を訪問するため幹線道路上の検問を再び通過したが、そこに詰めていたのはDKBA兵士になっていた。また入国管理官が国軍兵士と共に村内に滞在し、住民に身分証明証を発行している最中だった。最初にこの地を訪れた時から4年が経過したが、その間に政府は国境域におけるDKBAへの統治委任を進め、両者の関係は軟化しつつあるようだった。この関係の変化はKNUが弱体化し、国境域の安定化が進行していることも一因であると思われる。ミャンマー政府は、2004年にキンニョン首相を更迭して以降、KNUとの停戦交渉の開催を拒否している。政府にとってKNUはすでに脅威ではなく、交渉する必要もない相手なのだろう。

一度、2006年9月にKNUの引率で調査を試みたことがある。この時はカレン村落に訪問できない日もあり、夜間は村内に滞在することが出来ず、山中にある駐屯地での滞在を余儀なくされたりした(写真4)。しかも駐屯地に通じる道は地雷原となっており、ガイドに「ケン、絶対に道から外れるな」と注意され、緊迫しながら先を行く兵士について行ったのである。3往復もすると、道順も覚えてすこし緊迫感も和らいだ、と思ったらスクールで川が増水し、別のルートで駐屯地へ帰る日もあった。この日は、村でふるまわれたコメ焼酎を飲んでいて一気に酔いがさめ、また緊迫しながら夜道を進んだのである。KNUの引率で調査を実施したのはこの時が最初で最後となった。カレン州東部は、DKBAとKNUの支配地域が重複する競合地



写真4 山中にあったKNU駐屯地

帯であるが、行動の優先権がDKBAにあることはKNU関係者へのインタビューからも確認された。両者のパワーバランスを、身をもって知った次第である。KNU関係者によると、後にこの駐屯地は放棄されたい。

2010年に入って、政府はDKBAのボーダー・ガード・フォースと呼ばれる国境警備隊への改編を計画しているようである。政府は、これまで非合法であった武装勢力に合法的な地位を与えることで、共存と非合法的な武装勢力の存在といった法的な矛盾の解消を意図しているのかも知れない。第999特殊大隊は、改編に積極的であるようだ。ただ、アジアハイウェイ以南の国境域を支配地域とする国境開発旅団、あるいはこの旅団の一部が躊躇しているため、DKBA全体の改編はまだ進んでいないようである。

カレン州東部を訪れた本来の目的は、カレンの生物資源利用に関する知識、慣習、価値観、制度といった伝統的生態学的知識(TEK: Traditional Ecological Knowledge)を収集し、持続的な生物資源利用としての意義を考察して博士論文を完成させることだった。しか

し、流動的な社会環境によって村落の滞在が中断されるなど、調査は難航した。それに何ととっても、複数の武装勢力が混在しながら安定化していく社会環境の動態に私自身が惹かれてしまった。そのため博士論文のストーリーは大分変わってしまった。メプレー川水系に居住するカレンは、おそらくタイに居住するカレンよりも早い時期に、異なったルートで水稻栽培の技術を導入し今に至っている。そのため、より多くの世代を経て蓄積された、地域特有の TEK が残存していることが期待できる。今後も機会があれば再度訪問

して、今度は本当に TEK の収集に集中したいものである。しかし、本原稿を執筆している最中の 2010 年 11 月 8 日には、DKBA 国境開発旅団が国境の市街地ミャワディを一時占拠し、国軍と武力衝突したことがニュースに流れていた。ミャワディといえば最盛期の KNU ですら侵攻を避けていた街である。数日後には、この旅団の本拠地であるワレー近郊が、国軍の 2 個軽歩兵大隊に包囲されたとの知らせが現地から入った。国境の社会環境は今後も流動的な状況が続くのだろうか。だとしたらまだまだ目が離せない。